テーマ 13　持続可能な地域にしていくための観光振興（８件）

13－１　【秋田市　60 代】

大型客船の寄港地として今年も迎える船数が増加しているようですが、本県への宿泊数には結びついていないようですし、秋田港での歓迎もどのような状況なのか？一度、見学がてら港を訪れてみましたが、船はありましたが周辺には熱気が感じられません。なまはげがさらっと顔見せする程度で物販自体もそんなにはないように聞きました。夏に船から下りたお客さんが飲み物を買いたかったが、港にはそれがなく、仕方なく船に戻っていたようだという話も聞きました。数百から数千人単位のお客さんが向こうからお金を持ってやってくるのに、何もしていないに等しいのは本当に勿体ないと思います。

和菓子など（あんこ菓子、せんべい、おかき、まんじゅう etc)は、海外の人には本当に珍しい食べ物だと思いますし、食自体がクオリティーの高いことには自信を持って、いろいろな物を売り込むべきです。うどんは、ジャパニーズパスタとか。即席ラーメンもご当地ものがあります。秋田名物がっこ、漬物はジャパニーズピクルス。秋口は、リンゴやぶどうなどもあります。東京築地では、和牛串焼きが一本８千円で、立ち食いしていました。購買力が半端ない状況なのです。試食も準備してＰＲすれば、「秋田牛」も売れます。長旅でも賞味期限がＯＫなものはたくさんあると思います。

また、秋田県ではダリアを特産品としてこれからさらに力を入れるようですから、ほかの花卉も含めてクルーズの間に楽しめる小ぶりなフラワーアレンジなどを売り込む。円安傾向の今は、海外旅行客にとって２、３千円は全然惜しくない金額だと思います。海外では花を日常的に飾る習慣があるので、長旅の癒やしに購入する人は必ずいると思います。

以前、テレビで見た神戸港では、一般人ボランティアが旗を振って歓迎するというパフォーマンスがありました。秋田港では接岸付近のスペースにあまり余裕がないので、クルーズ線駅前の広場を活用するとか手立てをして盛り上げて欲しいです。前後の寄港地を盛り立てるためのような閑散とした秋田港であってはならないと思います。

宿泊も他県に流れるケースが多いようです。でも、今は個人客での来県者もいるようなので、積極的に個人インタビューをして、秋田の魅力を語ってもらい（改善点もついでに聞く）その内容をＳＮＳで発信するとか。それを見て来県した場合は特産品をプレゼント（ＰＲ）するとか。

黙っていたら、商売にはならないということだと思います。何を求めて旅をするのか、そのツーリストの目線を想像して、観光業者プラス商業関係者、生産者が一体化して対応できるように、県議会議員の皆さんには調整力があるでしょうから、秋田港寄港での経済活性化をお願いしたいです。

13－２　【大仙市　50 代】

行ったことのない都道府県に行ってみたいと思わせるより、行かなければならない理由を作った方がいいと思います。そのためにはつまり、秋田県が主会場となる全国大会を多数、できれば月１回、毎年 12 回、何かの全国大会を創設、開催するというのはどうでしょうか。剣道の魁星旗、500 歳野球などは、秋田魁新報社ががんばっていますが、その他の大企業で何か１つずつ創設してはどうでしょうか？綱引きとか、ママさんバレーボールとか、できれば大人数が来県する団体競技がいいと思います。100km マラソン、田沢湖マラソンもいいですが、個人競技は経済効果ではどうなんでしょう。おばこ節全国大会とかでは、来る人が少なすぎます。運動競技でも特殊な年代にして、300 歳バスケとか 400 歳バレーとか 500 歳サッカーとか 600 歳ラグビーとか 700 歳綱引きとか。自転車の駅伝で 10 人で県内を１周するとか。３段変速までの自転車だけにするとか。自転車はチームで１台だけにするとか。秋田内陸線と自転車で全線勝負するとか。

まあいずれ、なんにせよ、大人数で秋田県に行かなければならない理由になるイベントを考えついたらいいのではないかと思います。アイデアだけでも観光振興はできるし、無限大です。ただし、アイデアは早い者勝ちです。早くやらないと、他県に取られてしまいます。

13－３　【秋田市　30 代】

秋田県は出張者向け観光パッケージを強化し、プライベート再訪率上昇を目指す。県外からの進学・就職定着を並行で推進。多拠点生活を秋田でやらせるには競合する県が多すぎるし、そもそも多拠点生活を望む人はかなり少ないと思うので整備のためのコスパが悪すぎると思う。

13－４　【秋田市　70 代】

素晴らしい秋田の景観を観光資源として捉え、その実現に取り組む。

・　例えば、大潟村のサクラロードは、開花時の車で走行するだけの「通過人口」から、道路の拡幅、あるいは、「サイクリングロード」を新設するなどして「滞留人口」の増加を図る（この景観を車で素通りさせるのはもったいない）。

・　干拓地の縁を一周する道路及び干拓地内の道路を活用し、「サイクリング大会」等を開催し「来訪人口」の増加を図り、大潟村を全国的にＰＲする（サイクリング大会の拠点は大潟村の旧「生態系公園」の駐車場等を活用する。ソーラー大会や水上スキー等の開催の集客数より多く期待できる。）

・　村内の防風林を活用し、快適な自然空間を満喫できるようにベンチと駐車場を試験的に設置し、農業を見せる観光拠点とする（この素晴らしい景観は一長一短にできたものではない）。

・　旧「生態系公園」をバーベキューができる公園として活用し、人を呼び込んで（滞留人口）、県立大学校の大潟キャンパスで飼育した肉や、村内で産出したタマネギ等を提供し食材をＰＲする。

・　「経緯度交会点」までの道路は小石が散在する悪路につき要改善（地球上の当該地点の位置づけが判明し、沢山の人に見てもらいたいと思う箇所。せっかく設置して、もったいない。）

13－５　【大仙市　40 代】

雪寄せ協力隊、花火協力隊などボランティア兼宿泊付き観光プランを用意する。

13－６　【にかほ市　50 代】

秋田のローカル文化伝承

昨今、秋田県内に伝わり続けてきた、伝統文化の伝承が途絶え始めていると感じています。農家であれば稲藁文化、山郷であれば山菜や保存食、地域毎に伝わる食文化、森林の天然素材を使った工芸品、さまざまなところで、高齢化によって消え、失い始めていると思います。秋田の強みは、人が少ない集落生活にみられるような深い絆のある人と人の深いつながりのある暮らし、これが秋田の地域に暮らす体験観光の資源だと思います。ローカル文化の調査と、それを引き継ぎ

たい人を見つけて、文化の伝承を支える活動があってもよいのではないでしょうか。企業誘致のような新たな風も必要ですが、秋田人のルーツであるような文化というのは、この秋田の地にしかない、大切な資源であると思います。ただ単に、人口減少で過疎だからしょうがないと言って消えてしまうことは、秋田らしさを失うことだといっても過言ではなく、それを残して伝え続けることが持続可能な地域だと考えてみてはいかがでしょうか。本質の文化があることで、秋田文化に触れたい人が訪れてくれるのではないでしょうか。

13－７　【にかほ市　40 代】

観光に関しては単に大量の観光客を呼び込む昭和的なスタイルの観光から脱却し、ニッチなニーズに応える形で秋田の魅力を表現すべきです。すなわち、秋田の自然や文化の質を理解し、その価値に見合った対価を支払う方々に選んで訪れていただく観光スタイルを推進してほしいと思います。

そのうえで、滞在型観光や体験型観光を県が体系的に構築し、それらを連携・リレーできるようにすることで、各地域の独自性を活かしたまとまりのあるＰＲが可能になると考えます。これにより、秋田の観光資源や文化、自然環境の優位性を守り育てつつ、持続可能な地域づくりに繋がるものと期待しています。

また、首都圏での暮らしの中で感じたことですが、秋田県のＰＲは全体として弱く感じられます。県として県内の宝をしっかり認識し、「オール秋田」で力を合わせてＰＲを強化すべきです。県は各自治体の取りまとめ役として他地域に積極的に出向き、秋田の魅力を発信していってほしいと考えます。

以上、秋田県の未来に向けた観光振興とＰＲ戦略の一助となれば幸いです。

13－８　【由利本荘市　70 代】

「稼げる観光地づくり」、「秋田県の推し」、「持続可能な地域にしていくための観光振興」、以上は全て、秋田県の魅力や良さ、強みである「自然の豊かさ」があってこそである。

※テーマ６、テーマ 11 に再掲。